東京・山谷の「きぼうのいえ」で逝く人々

他人だからこその「豊かな看取り」

家族もなく、行く場所もないまま、死期を迎えた人々が入居してくる山谷のホスピス――。その家で、逝く人々と見送る人々は、どうかかわって過ごすのか。『大いなる看取り』の著者が、あらためて綴る。

『週刊朝日』副編集長　中村智志

不器用に生きてきた人々

時代の波が押し寄せて、ファミリー向けマンションも建ってきたとはいえ、東京・山谷は、今なお日雇い労働者の街の匂いを色濃く残している。

地下鉄日比谷線南千住駅から歩いて数分。大通りから一歩入れば、一泊千円程度から泊まれる低層のドヤ（簡易旅館、簡易宿泊所）が立ち並び、昼間から狭い路上に座り込んで酒を飲む男たちがいる。

そのホスピスは、そんなドヤ街の真ん中にある。「きぼうのいえ」という。元は銭湯だった土地に二〇〇二年十月に開設され、鉄筋四階建ての〝本館〟と鉄骨二階建ての〝別館〟がある。合わせて三十二室。

ただし、一般のホスピスとは異なる。ほとんどの入居者は、家族がいないか、いても縁が切れていて、ほかに行き場がない。そして全員が生活保護を受けている。

私が「きぼうのいえ」を初めて訪れたのは二〇〇四年の夏のことだった。一九九八年に、新宿西口の段ボールハウスで暮らす人々の物語を一冊の本にまとめたことがあり、そのときは路上の人たちの「生」を中心に見たから、今度は路上の「死」を見つめてみたいという気持ちもあった。

そんな思いを抱いて行った私に、施設長の山本雅基さんはこう語った。

「ここでは、最後に与えられた時間に、それぞれの人がその人らしく生き直す

『座』を獲得するお手伝いをできればと思っているんです。不器用に生きてきた人が多く、ほんとうは優しいのに優しさを出すことを許されなかった人もいる。そういう人は優しく、また怒りっぽかった人は、怒りっぽく。今生の生を有意義に生きられることを信じています」

入居者の過去は問わない。意外にも路上生活を送っていない人も多かったが、ひとりひとりの人生は波瀾万丈で、さながら昭和史の一断面をトレースするかのようであった。

戦時中に七三一部隊に所属していた人、戦後シベリアに抑留されていた人、北海道から妻子ある男性と駆け落ちしてきた女性、スリで捕まった経験もある捕鯨船員、拳銃五百丁を密輸したと自慢するやくざ、甲子園の優勝チームの選手、ジャズマン、子守、そば屋の女性店主、男性看護師、商社マン、蒸気機関車の運転士……。

共通するのは、人生のどこかで深い傷を負い、家族と離れて、この小さなホスピスにたどりついていること、ここで最終章をそれぞれの形で目一杯生きていることであった。

〝自分らしく〟最後を生きて

中野雅博さんという元料理人がいた。長崎市の出身で、向島の料亭で包丁を握ったこともある。二〇〇七年春、まだ五十代半ばの若さで末期の肺がんを患い入居してきたが、ほどなく脳に転移した。脳圧を下げるためにステロイドを使っていて、その影響で末期がんとは思えないほど元気になった。髪も茶色く染めて若々しい。中野さんは、「(スタッフや医師ら)みんなに料理をしてお礼したい。懐石料理をつくる」と言うと、「六月御献立」と紙に筆ペンで十五品目ぐらい書き上げた。そして、スタッフの控室の小さな台所に立ってつくった。フォアグラ大根、うに豆腐、イチジクの赤ワイン漬け、茶碗蒸し、湯葉焼売(シュウマイ)、花びら模様の飾りがついたホタテ焼売。創作料理の店にもいた人らしく、個性的な品が多かった。おどろいたのは繊細さだ。ボウルは水で洗ったあとにだし汁でさっと流してから本格的にだし汁を入れる。水滴とだし汁が混ざり、味が微妙に変わるのを防ぐためという。そんなときの中野さんはどこか粋だった。

夏が始まるころ、中野さんは亡くなった。この年の五月場所で横綱昇進を決めた白鵬の優勝パレードを一緒に見に行ったという訪問ヘルパーの女性は、中野さんと特に親しく、中学生の息子の運動会の弁当をつくってもらったこともある。彼女は柩(ひつぎ)に一枚二千円のサーロイン肉を入れた。というのも、中野さんの部屋でホットプレートでステーキ肉を焼いて食べるはずだったのだ。

旅立ちに立ち会ったのは、山本さんの妻で元看護師の美恵さんだった。

「もう気づいていると思うけど」

美恵さんはベッドの上で中野さんを左腕の中に抱えると、そう語りかけた。

「もうすぐ天国に行くんだよ。中野さんがここに来てくれて、とっても楽しかったね。みんながこんなに愛情深い人とは、私もびっくりするくらいだった。中野さんが愛情を引き出してくれたんだよ。どうもありがとう」

すでに言葉を発することができなかったが、中野さんはじっと聞いていた。

「天国に行くってことは、肉体の卒業であって、魂のふるさとに帰るんだよ。卒業しても、意識はそのまま残ると思う。怖がらないで。逝きたくなったら、力抜いていいからね」

中野さんは静かな呼吸を二回すると、逝った。まさに山本さんが話すように、「今生の生」を自分らしく駆け抜けた最期であった。

考えてみれば、もしも病院に入院していたら、残りわずかな日々をこんなにも自由に過ごすことは難しかっただろう。「きぼうのいえ」のひとつの特徴が、ここにある。

日々のすべてが「看取り」のとき

東北の炭鉱夫だった男性は、末期がんで鼻に酸素吸入用のチューブを入れていたが、女性の訪問看護師と東京タワーまでデートした。彼が色鉛筆で仕上げた東京タワーの絵は、空に向かい堂々と伸びて鳥が何羽も舞い、楽しい気分が伝わってきた。「きぼうのいえ」で毎年玄関前に飾る七夕の笹に、彼はこう書いた。

〈俺の輝く生命　永遠に!〉

浅草のカラオケで歌って踊ったり、青山のブルーノート東京でジャズのリズムに身を任せたり、得意の書道でスタッフの名札を筆で書いたり、糖尿病なのに焼酎に梅干しをたっぷり入れて飲んだり、恒例のお茶会で人生遍歴を講談のように語っては周囲を笑わせたり、医師に内緒でたばこを吸ったり甘いものを食べたり……。

医学的な視点で眺めたらおそらくよくないことでも、臨機応変に入居者の気持ちを優先させる。ストレスが解消されるのか、医師に告げられた余命より長く生きる人が目に付いた。「口からの食事はできない」と申し送られた人がおかゆを食べられた例もある。さらに言えば、人間不信から閉ざしていた心をいつの間にか開く人もいた。

木曜日に談話室で開くお茶会をはじめ、春には隅田川べりでお花見を楽しみ、夏には屋上から隅田川花火を堪能し、元旦には玄関前の路上にお神楽の一座を招く。こうしたイベントも大切にされる。また、旅立ちを目前にした人には、火曜日に訪れる米国人の女性

●なかむら・さとし
一九六四年東京都生まれ。上智大学文学部卒業後、朝日新聞入社。『アサヒグラフ』『アサヒパソコン』編集部や東京本社社会部などを経て、現在『週刊朝日』副編集長。一九九八年、『段ボールハウスで見る夢』(のち『路上の夢』と改題)で講談社ノンフィクション賞を受賞。今年『大いなる看取り』(新潮社)を著して注目されている。

宣教師が、音楽療法というよりも、魂を天国へ誘うようなハープを奏でる。

都心の大病院で看護師をしていたスタッフに、病院と「きぼうのいえ」の違いを尋ねると、こんな答えが返ってきた。

「病院は治療です。ここは生活です」

ここでは、看取りは、「死の瞬間」だけの話ではない。入居者とスタッフが、人と人として向き合って過ごす日々全体が、看取りなのである。マザー・テレサの「死を待つ人の家」の日本版を夢見て開設したはずの山本さんはいつの間にかこう語るようになった。

「きぼうのいえは、生きる場所なんです。死を待つ場所ではありません」

孤独死する高齢者のために

山本さんは、介護のプロではない。

一九六三年、東京の下町で生まれた。父は国のキャリア官僚で姉がひとり。転勤が多かった。転校先でなじめず、いじめのターゲットにされた。八五年、日航機墜落事故を見て「悲しみの底にある人のそばで生きよう」と決意した。聖職者を目指して上智大学神学科に入学。在学中から難病の子どもを持つ親を支援する市民団体で活動し、卒業後は事務局長となった。しかし、医師である理事長が絶対という人間関係に悩み、二〇〇〇年ごろ、うつ病の薬を大量に焼酎で飲んで気を失った。団体を辞めると引きこもり、軽いアルコール依存症にもなった。お寺で座禅を組むなどして立ち直ってゆく中でこう考えたという。

〈このままホームレスのようにひとりで死んで行くのだろうか。自分は何をやりたいのか。そうだ、ホームレスのためのホスピスだ〉

こうして山本さんは「最後の親不孝」と父名義の定期預金を担保に借金し、ホスピスをつくる運動を始めた。その過程で中央区の福祉事務所の職員からこんな助言を受けた。

「ホームレスは目立つけれど、実は、生活保護を受けながらテレビを友達に過ごしていて、孤独死する高齢者が少なくない。彼らの家をつくってくれませんか」

一方、妻の美恵さんは、山本さんより五歳年上で、長野県の伊那地方の出身。高校卒業後に上京して看護師になった。勤め先の病院で妻子ある医師と恋に落ちる。純愛だった。妻はなかなか離婚に応じず、その状態が続いた。美恵さんはこの間に医療関係の出版社の編集者に転身した。そして、ついに離婚が現実味を帯びてきたころ、悲劇は起きた。梅雨時に渓流釣りに出かけた彼が滝壺に落ちたのである。最愛の人の死で、いったんは自殺も考えた美恵さんは死生観が変わった。死後の世界にも関心を抱くようになった。

二〇〇一年四月、「死の哲学」で知られる上智大学のアルフォンス・デーケン教授が開く社会人向け講座で山本さんと美恵さんは出会い、互いの人生を語るうちに結ばれた。

そんなふたりだけに、「きぼうのいえ」は、不器用に試行錯誤を繰り返している。しかしだからこそ、効率はいいがどこか心が通わない介護に陥らない。「きぼうのいえ」では、スタッフがすべての入居者と等距離で接するのではなく、特定の入居者と仲良くなることがあたりまえだ。けんかをすることもあるが、濃密な関係になるからこその看取りでもある。

親しい入居者を抱いて送る

中川竜さんは、ボーイッシュな感じの女性である。北海道生まれ、父は洋画家、母は看護師。帯広畜産大学で、シジュウカラなどの巣に卵を産むトリキンバエの研究をしていた。

十勝地方のブナの森に鳥の巣箱を三百個もかけて生態を観察した。何かの事情でトリキンバエの幼虫が全滅すると、死肉が好きな別の虫がすぐにたかる。森の中は豊かな生命力とともに、それと等量で等価値の豊かな死にも満ちている。

ある生の終わりは、別の命の始まりであり、そのダイナミックな循環に人間も含まれている。竜さんはそう気づいた。

「死ぬことは、あんまり悲しいとかつらいとか、そういうものじゃないんです。死も含めて大きなものに祝福されている気がします」

卒業後はホスピスで働きたいと考え、苦労して看護師になり、都内の末期がん患者が多い病棟で働いた。充実していたが、家族というクッションがあるため、患者と直に向き合いきれない。そこで、「きぼうのいえ」へ来た。

そんな竜さんが親しくなった入居者は、飯田栄一さんといい、体に穴が三つあった。ひとつは喉頭がんが原因でできたあごの下の傷穴で、ここから食べ物がこぼれるので、食事を摂れない。

もうひとつは首の付け根の一円玉大の穴。呼吸用だが、声を失い匂いもかげない。三つ目は胃に開けた胃ろうで、ここにチューブを通して栄養剤を摂る。もっとも入居当初は、お酒を流し込んで酔っていた。

飯田さんには少年のようなところがあり、たとえば介護する竜さんのTシャツがふくらんで隙間ができると、覗き込んだ。ふたりはマウンテンバイクの話で盛り上がったりしながら筆談とジェスチャーでどんどん親しくなった。恋人とも違う、独特の距離だった。あるとき飯田さんが紙にこう書いた。

〈俺の田舎　竜と行く〉

田舎は北陸地方の日本海に面した町。痰を吸引する吸引器も持参しなければならない。さすがに竜さんもおどろいたが、不可能ではない。幸い、飯田さんは「きぼうのいえ」の住人には珍しく入居時に家族が付き添っていたし、スタッフや竜さんの夫も後押しした。

現地の空港までは家族が迎えに来てくれた。夕食時には長兄が「とにかく帰ってきてめでたい」と乾杯した。竜さんはその夜、飯田さんと同じ部屋で寝た。ストーブの前にふたりで座ると、飯田さんはメモ帳を取り出し、

〈竜がいたから〉

すばやくそう書いた。それが最初の直接的な感謝の表現だった。

帰京後の飯田さんは、携帯メールを覚え、文章が苦手ながらも〈きょうはおやすみでっか。さみしいです〉、〈ごはん食べ〉などと温かいメールを送った。そして最後は、竜さんの腕の中で亡くなった。

「ツーショットでも撮ろうか」

ベッドの上で携帯電話をふたりのほうに向け、シャッターを切ろうとしたときだったという。バックに流れていた石原裕次郎の曲が、まもなく「粋な別れ」に替わった。

竜さんは、深い寂しさと同時に、ある達成感や「こんなにも愛されていたのか」という思いに満たされてきた。そこに至れたのは、出会ってから数ヵ月の間にだんだんと死を受け入れたのではなく、受け入れたところから始めてきたからだろう。

看取りとはこういうことか

「寂しがりやの人はみんなの前で、天国に行くんです。孤独が好きな人は、部屋から誰もいなくなった瞬間に安心して逝くんです。ほんとうにその人らしい逝き方が実現します」

山本さんがこう語ったことがある。飯田さんの最期は、たしかにそうだった。私自身、「きぼうのいえ」で、七三一部隊の話を聞いてきた九十代の男性を、目の前で送った。逆に、たまたま私が仮眠をとるために部屋を出た小一時間の間に旅立った人もいた。その瞬間に彼のそばにいたのは、姉と親友であった。

今も焼き付く光景がある。今日か明日かという末期がんの男性患者の足を訪問の看護師がマッサージを始めた。てっきり医学的効果があるのかと思って尋ねると、彼女は考えながら、

「たぶん自分のためです。うふふふふ。大事な人をハグしたいと思うように、無条件に、ここにいるよ、私はあなたを愛してるんだよって伝えたい。本能でしょうね、たぶん」

と丁寧に答えたのである。何かをすることよりも、ただそばに寄り添うこと。看取りとはこういうことなのか、と私は気づかされた。

元小学校教諭の六十代の女性スタッフが静かに語った言葉も忘れ得ない。

「家族だからって魂に届く介護ができるわけではありません。家族には生活の現実があるから。むしろ、他人だから看取れるんです。きぼうのいえのスタッフは、おどろくほどの愛情の深さです。それでも、家族ほどに取り乱すことがない。患者が死を受け入れているのに家族が受け入れていないと、患者はつらいものです。冷静な看取りは、実は、看取られる人にとっても幸せなことなのです」

私が「きぼうのいえ」の話をまとめた『大いなる看取り』（新潮社）を読んだ作家の高山文彦さんは、「きぼうのいえ」を「故郷のよう」と表現した（「熊本日々新聞」八月三十一日付）。私はずっと「ゆるやかな大家族」だと見ていたが、たしかに、「故郷」といってもいい大きさや奥行きも内包しているだろう。

政府の国勢調査では、一人暮らしの高齢者は、二〇〇五年には三百八十六万人。九〇年の二倍半に上る。「孫子に囲まれて大往生」ではなく、他人に送られる時代はすぐそこまで来ている。

山谷のホスピスというと、一見、特殊に映る。しかし、「きぼうのいえ」は、全国であたりまえになるであろう看取りの形を先取りした壮大な試みに取り組んでいるのである。✪